

児童生徒の資質や能力を高める 指導と評価に関する研究

- 教科の指導において「学力」を適切にとらえるための
評価規準と評価方法の開発を中心に - (第1報)

教科領域教育室 舟山美知 紺野盛
尾澤厚子 西前和恵
照井和代 宮康幸

研究協力校

花巻市立若葉小学校 東和町立田瀬小学校 石鳥谷町立石鳥谷中学校
花巻市立宮野目中学校 県立花北商業高等学校

研究協力員

花巻市立花巻小学校 要永澄 花巻市立若葉小学校 藤本実 森重真行
花巻市立前田小学校 菊池裕美子 花巻市立宮野目中学校 佐藤敬子 加賀智子
花巻市立花巻中学校 太田健 石鳥谷町立石鳥谷中学校 佐藤めぐみ 千葉徳子
県立花巻北高等学校 及川浩純 県立盛岡第二高等学校 須藤ゆかり
県立花北商業高等学校 橋本眞一 菊池人見 県立不来方高等学校 佐々木朋也

研究の概要

この研究は、「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発することにより、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価について明らかにし、小学校・中学校・高等学校の教科の学習指導の改善に役立てようとするものである。

3年計画で取り組む研究で、その1年次にあたる本年度は、児童生徒にはぐくみたい資質や能力等の概念を明確にし、学力と評価についての基本的な考え方を検討した。また、県内の約1,600人の教員を対象に、学力と評価の考え方についてのアンケート調査を行い、考えの傾向や学習指導上の課題等を把握した。そして、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価に関する基本構想を立案し、推進試案を作成することができた。

キーワード：資質や能力 学力 指導と評価 学習指導 評価規準 評価方法

研究目的

新しい学習指導要領は、完全学校週5日制の下、教育内容を厳選し、ゆとりの中で学習指導要領に示す基礎・基本を確実に身に付け、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしています。このねらいは、日常の指導と評価の積み重ねによって実現されるものであり、日常の指導のなかで児童生徒の学習状況が適切に評価され、その後の学習に活かされることが重要です。そこで、これからの学習指導においては、この学習状況を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発・工夫するとともに、評価に基づく指導法を改善することが求められています。

そのためには、学力や評価に対する個々の教師の考え方を調査し、それを整理するとともに、児童生徒にはぐくみたい資質や能力等のいわゆる「学力」を適切にとらえる評価の在り方を明らかにする必要があります。また、学習指導では、児童生徒にどのような「学力」を身に付けさせようとするのかを明確にした評価規準を設定し、児童生徒が学習の過程において自分の学習状況に気付き、学習を見つめ直し、その後の学習の改善に役立てることができるように指導と評価を一体的に進めることが必要だと考えました。

そこで、この研究は、「学力」の概念を具体化するとともに、「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発することにより、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価について明らかにし、小学校・中学校・高等学校の教科の学習指導の改善に役立てようとするものです。

研究の成果

この研究は、平成13年度から平成15年度にわたる3年次研究です。

第1年次（平成13年度）は、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価に関する基本的な考え方を検討し、学力と評価の考え方についての県内の教員に対する調査と基本構想の立案及び推進試案の作成に取り組みました。第2～3年次（平成14～15年度）は、教科ごとに推進試案を作成し、推進試案に基づく授業計画の立案及び授業実践に取り組み、3年間の研究のまとめをします。

本稿では、第1年次の取り組みについて述べていきます。

1 児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本的な考え方

(1) 児童生徒の資質や能力とは

資質や能力については、第15期中央教育審議会第一次答申（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」平成8年7月19日）の第1部に、今、児童生徒に必要なものとして、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」の三つがあげられています。また、こうした資質や能力を「変化の激しいこれからの社会を生きる力と称する」とし、さらに、第2部では初等中等教育において育成したい資質や能力について、具体的に示されています。

本来、資質とは、「生まれつきの性質や才能」、能力とは、「物事を成し遂げることのできる力」（「日本国語大辞典」小学館）という意味がありますが、本研究においては、答申をふまえ、この資質と能力を分けて考えずに、互いにかかわり合い、引き出し合いながら高まっていく一つのものであると考えます。

(2) なぜ、児童生徒の資質や能力を高めるのか

現在、学校教育には、児童生徒が、単に知識を覚え込むのではなく、実感を伴って基礎的・基本的な内容を自らのものとして確実に習得し理解を深め、その後の学習や将来の生活に生きてはたらくようにすることが求められています。

新学習指導要領では、完全学校週5日制の実施に伴い、授業時間を縮減していますが、それに対応して教育内容を厳選し、児童生徒がゆとりをもって学習できるようにしています。このような状況のなかで、前述の「児童生徒の資質や能力」を高めることこそ、これからの学校教育において必要とされるものだと考えます。

(3) 学力と「学力」

従来、学校教育では、知識の量の多少をもってそれを学力ととらえる考え方や、技能の良し悪し、理解の度合いで個々の学力を判断するような考え方が多く見られました。

しかし、本来、重視しなければならないことは、学習の結果のみを重視して学力をとらえるのではなく、児童生徒の学習過程を大切にし、そのなかで個々の考え方や態度の変化をとらえ、内面に存在する情意的側面も合わせて、個人の学力を総合的に見ていくという考え方です。

つまり、今日の学校教育では、学習指導要領に示す基礎的・基本的内容を確実に身に付けることはもとより、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかによって学力をとらえる必要があります。

そこで、本研究においては、基礎的・基本的な内容に関する知識技能だけでなく、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力などまでも含めた力を育てたい学力ととらえました。そして、教科における基礎的・基本的な内容に関する知識技能、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを教科における学力とし、これを「学力」と表記することにしました。

(4) 今、なぜ、評価規準と評価方法の開発なのか

教育課程審議会の答申（「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」平成12年12月4日）により、これからの評価の基本的な考え方として、学習指導要領が示す目標に照らしてその実現状況を見る「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」を行うこと、評定については、小・中学校において、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）に改め、高等学校については現行同様、目標に準拠した評価とすることが示されました。

このことをふまえて、学習指導においては、児童生徒一人一人の目標の実現状況を客観的に評価する適切な評価の在り方を明確にする必要があると考えました。

日々連続する学習指導において教師が行っている様々な角度からの評価は、これまでの経験のもとに、その多くが児童生徒の学習状況を正しくとらえるものであったと思われます。しかし、評価規準や評価方法の客観性について言及すると、曖昧な点があることは認めざるを得ないのではないのでしょうか。

そこで、教育課程審議会の答申を受けたこの機に、これまで行ってきた評価を振り返り、より信頼のおける評価規準と評価方法を開発することが重要だと考えました。

(5) 学習指導における評価とは

学習指導は、児童生徒のよりよい成長を目指して、目標の達成へ向けて、計画を立てて行うものです。また、評価は学習をよりよく展開するために必要な活動であり、繰り返される一連の学習指導過

程の一部をなすものです。

評価は、指導者にとって、児童生徒が学習指導目標の実現に向けてどのように変容しているか、また、どのような点でつまづいているのかを把握し、どのように支援していけばよいかを明らかにするものです。また、児童生徒にとって、学習過程において自らの学習状況に気付き、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習の改善に役立てることができるような情報をもたらすものです。

このように学習指導における評価は、教師の指導や児童生徒の学習の改善を行うためのものであり、結果として児童生徒の学習の充実につながるものでなければなりません。

(6) 指導と評価の一体化

学習指導においては、指導と評価を常に一体として行うことが必要です。

指導と評価の一体化とは、学習指導過程における児童生徒の反応や取り組みの状況をとらえて、それに応じて指導計画や方法を変更したり、児童生徒を指導したりすることです。

評価は、ある一定期間の児童生徒の目標の実現状況を総括的にとらえるばかりではなく、指導の目標にそって適切な方法によって学習過程でなされなければなりません。さらに、その結果が、次の指導と学習活動に生かされなければなりません。したがって、指導と評価の一体化を図るためには、少なくとも次の8点が必要です。

学習指導目標を明確にすること	評価項目を明確にすること	項目ごとの評価を	
的確に行うこと	児童生徒の内面をとらえた評価を行うこと	評価結果に応じた指導を	
行うこと	指導計画の修正・改善を行うこと	項目ごとの評価から、学習指導目標の実	
		現状況をどのようにとらえるか、総括の仕方を明確にすること	学習指導目標の実現状況を児童生徒個々へ知らせること

ある一つのまとまりからなる学習内容の指導には、学習指導目標があります。指導計画を立案するときには、この目標を明確に設定することが第一です。学習指導目標はいくつかの要素から構成されるので、目標を分析的にとらえ、評価項目を明確にします。この項目ごとの評価が客観的にできるように評価規準を設定するのです。単位時間の学習指導は、評価項目の一つ、またはいくつかを重点として展開するので、評価は、設定した評価規準に照らして実施します。評価の実施のためには、学習指導過程のどこで、何をを用いて行うのか、どのような姿が見られれば達成したと判断するのか、その判断基準を設定することが必要です。また、このような目標に準拠した評価とともに、児童生徒個々の努力の様子等をとらえ、学習意欲の喚起に結び付ける評価の工夫が必要です。そこで、児童生徒の内面をとらえた評価の充実を図りたいものです。

学習指導過程で評価を行った後は、結果に応じて、補充や発展の学習が必要です。評価のどのような結果に対して、何を行うのか計画しておき、結果に応じて適切な指導をします。そして、次に続く指導の計画を見直し、修正・改善を行います。また、学習指導目標全体の現況をどのようにとらえるか、その総括の仕方を明確にすることも必要です。総括した結果に即して、補充、発展の指導や次に続く指導の計画の修正・改善を行います。児童生徒に対しては、目標の実現状況を一人一人に知らせることが大切です。それとともに、集団に準拠した評価、個人内の努力の様子などを知らせ、学習の継続、発展の動機付けとすることも大切です。

指導計画を立てるときには、これらのことを具体的に明記し、指導と評価を一体として学習指導を展開し、児童生徒のよりよい育成に結び付くようにすることが大切です。

2 学力と評価の考え方についての調査

この調査の目的は、学力と評価についての考えの傾向や学習指導上の課題を把握することです。対象は、今年度、当教育センターで行った研修講座の研修者である小学校・中学校・高等学校の教員です。調査紙は、学力について3設問、評価について4設問の計7設問で構成し、回答はすべて自由記述です。【表1】は各設問のねらいと内容、分類の観点をまとめたものです。

【表1】設問のねらいと内容等

	設問のねらい	設問番号と内容	分類の観点
学力について	学力の高低の考え方について ・学力の高低をどのようにとらえているかを把握する。 ・学力の高低を何をもとにしてとらえているか、調査結果をみて第三者的な立場で答える形式により、学力をどのようにとらえているかをつかむ。	設問1 この〔表〕を見て、あなたは、回答した先生方が学力が高いか低いかを何によって判断していると思いますか。(表：省略)	ア 学力検査等のペーパーテストの点数で イ ペーパーテスト以外で ウ ア、イの両方で エ その他 オ 無答
	「育てたい学力」とは何か ・育てたい学力をどのようにとらえているか、明らかにする。	設問2 あなたが児童生徒に育てたい学力はどのようなものですか	ア 関心・意欲・態度 イ 思考力・判断力 ウ 表現力 エ 実生活に生かす力・応用力 オ 知識・技能 カ 問題解決力 キ その他 ク 無答
	「育てたい学力」を育てるむずかしさ ・理想を実現できない要因を明らかにする。 ・現実と理想のギャップをどのようにとらえているかを明らかにする。	設問3 設問2で記述した学力を育てるときに、あなたがむずかしいと思うことは、どのようなことですか。	ア めざす姿がわからないこと イ 意欲をもたせること ウ 基礎・基本を定着させること エ 育てる方法がわからないこと オ 個に応じた対応ができない状況にあること カ その他 キ 無答
評価について	学習指導における評価のとらえ方 ・評価をどのようにとらえているか、その現状を明らかにする。 ・「何をもとに評価しているのか」という問いに対して、何が挙げられるのかにより、評価をどのようにとらえているかを把握する。	設問4 あなたは、教科の学習指導を行うときに、何をもとに、評価をしていますか。	ア 指導目標をもとに イ 評価のための方法・材料 ウ その他 エ 無答
	評価の生かし方 ・評価の生かし方の現状を明らかにする。 ・生かし方のよい点、不足な点などを把握する。	設問5 あなたは、教科の学習指導を行うときに、評価をどのように生かしていますか。	ア 児童生徒の意欲付けのために イ 指導の改善に ウ 評定に エ 生かしていない、わからない オ その他 カ 無答
	評価のむずかしさ ・評価のどのようなことがむずかしさとして挙げられるのか。 ・各自が行っている評価について、むずかしいと感じていることをとらえる。 ・評価についての現実と理想とのギャップを明らかにする。	設問6 あなたが教科の学習指導において評価をするとき、むずかしいと感じていることはどのようなことですか。	ア 評価基準の不明確さ イ 評価の方法 ウ 評価の生かし方 エ その他 オ 無答
	評価の在り方 ・評価をどのように行えばよいのか、理想の評価観を把握する。	設問7 あなたは、教科の学習指導において、評価は、どうあればよいと思いますか。	ア 児童生徒の意欲付けに生かす イ 指導の改善に生かす ウ 基準を明確にする エ 具体的な方法を挙げている オ その他 カ 無答

調査の結果、1,586回答を得ました。記述された内容を設問ごとに設けた分類の観点によって分類しました。記述の内容が複数の観点に当てはまる場合は、それぞれの観点に分類しました。その結果をまとめて設問ごとに示します。

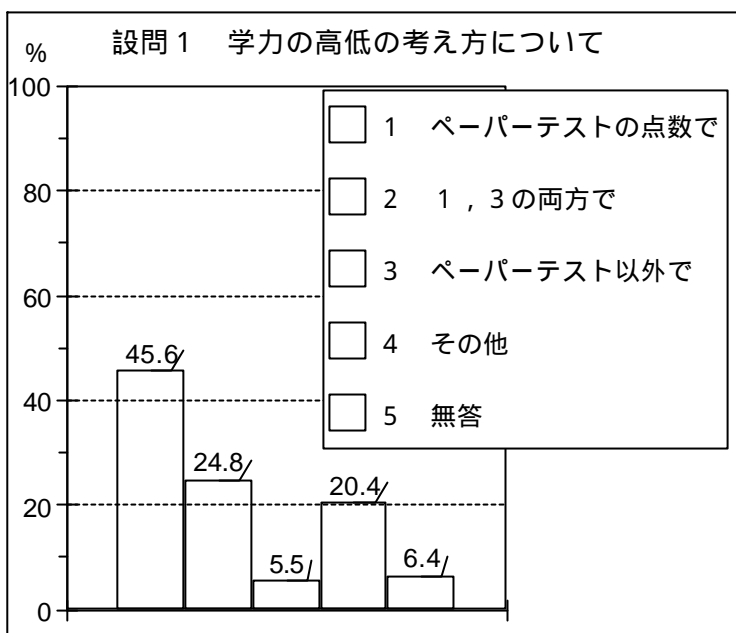
(1) 学力の高低の考え方について

【図1】から、高い低いといわれている学力を、学力テスト等のペーパーテストの点数でとらえていると考えた教師が半数近くいることから、ペーパーテストの点数を学力ととらえる傾向が強いととらえました。また、ペーパーテストの点数とペーパーテスト以外の多くの事項を加味しながら学力をとらえていると考えた教師とペーパーテスト以外のたくさんの事項から学力をとらえていると考えた教師が約3割いることから、「学力」を何によってとらえているかは、教師によって様々であると考えることができます。

(2) 「育てたい学力」とは何か

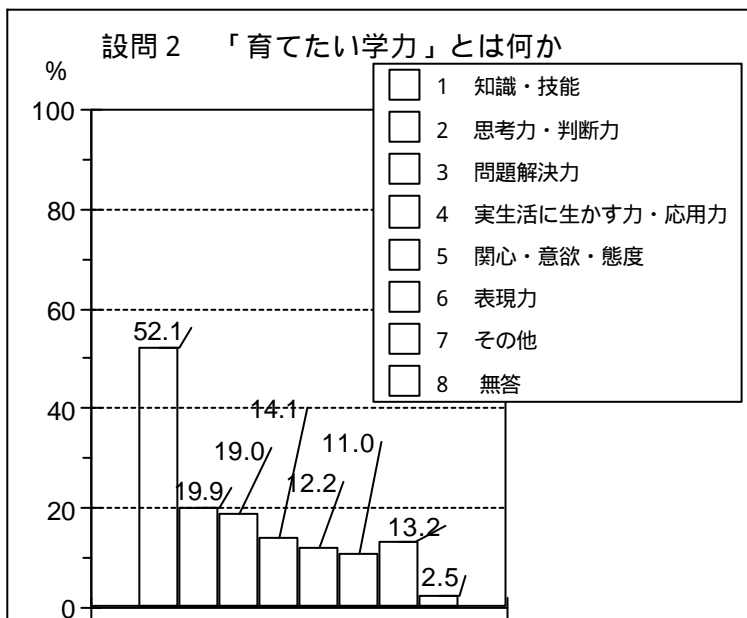
【図2】から、「育てたい学力」として最も多く挙げられたのは、「知識・技能」だということがわかります。その具体的な記述の主なものは、「基礎・基本の定着」「各教科における力」「読み書き計算」「テスト学力」などでした。また、「実生活に生かす力・応用力」の具体的な記述の主なものは、「学習したことを応用する力」「学んだことを使って学習を発展させる力」「覚えたことを生活のなかで使える力」などでした。「その他」には、「生きる力」「情報活用力」などが含まれています。

このことから、教師が児童生徒に育てたい学力は、教科における知識・技能はもちろんのこと、思考力・判断力、表現力や関心・意欲・態度等も含め、多岐にわたっていることがわかります。



設問1 この表を見て、あなたは、回答した先生方が学力が高いか低いかを何によって判断していると思いますか。(表は省略)

【図1】「高い低いといわれている学力」を何によってとらえていると考えたかの状況

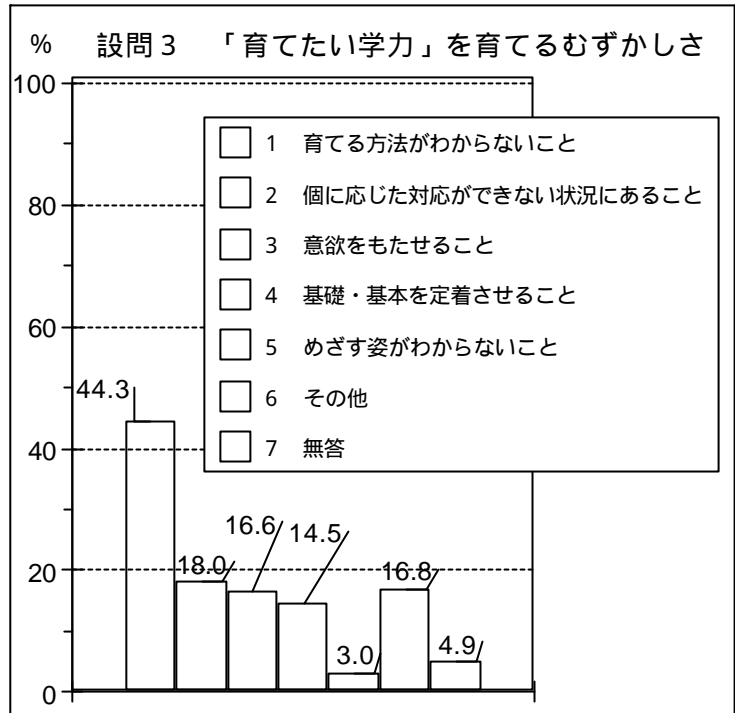


設問2 あなたが児童生徒に育てたい学力は、どのようなものですか。

【図2】「育てたい学力」に関する状況

(3) 「育てたい学力」を育てるむずかしさ

【図3】から、「育てたい学力」を育てるときのむずかしさとして、4割強の教師が、「育てる方法がわからない」と回答していることから、「育てたい学力」を育てるにあたって、どこからどのように改善したらよいのか、指導方法がわからないと感じていることがわかります。「個に応じた対応ができない状況にある」と回答した教師は約2割いることから、「育てたい学力」を育てるための解決策の一つとして、個に応じた対応を考えていることがわかります。「意欲をもたせること」は2割弱、「基礎・基本を定着させること」は1割強がむずかしいと回答していることから、情意面の育成、基礎・基本の育成についてもむずかしさを感じていることがわかります。また、「めざす姿がわからないこと」と回答した教師もいることから、「育てたい学力」というものをそれぞれが思い描いてはいるものの、それが、児童生徒をどのような姿に育てることなのか、具体的な児童生徒像として明確になっていないところにもむずかしさを感じていることがわかります。



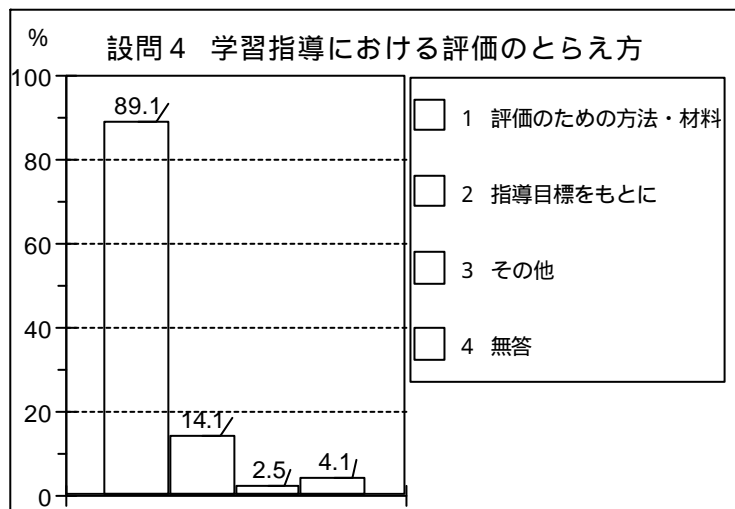
設問3 設問2で記述した学力を育てるときに、あなたがむずかしいと思うことは、どのようなことですか。

【図3】「育てたい学力」を育てるむずかしさに関する状況

(4) 学習指導における評価のとらえ方

【図4】から、約9割の回答が「評価のための方法・材料」に分類され、「指導目標をもとに」に分類される回答は1割強であることがわかります。

多数の回答が集中した「評価のための方法・材料」の主な内容として、「ペーパーテスト（の得点）」「実技テスト（の得点）」「作品やノート、レポート等の提出物の内容及び提出状況」「授業中の発言や反応、行動（挙手、うなずき、つぶやき、学習に取り組む態度等）」「予習・復習など家庭学習」「自己評価」「相互評価」「個人内評価」等、多種多様な評価方法・材料があげられました。



設問4 あなたは、教科の学習指導を行うときに、何をもちに、評価をしていますか。

【図4】学習指導における評価のとらえ方に関する状況

さらに、「評価のための方法・材料」に関する回答をしたほとんどの教師が「テスト、ノート、提出物、

発言内容、挙手、表情、自己評価カード」というように複数にわたるものを記述していました。

これらのことから、教科の学習指導において、教師は評価の方法・材料の選択や組合せを工夫しながら、児童生徒の学習状況を把握し評価を適切にしようとしていることが推察されます。

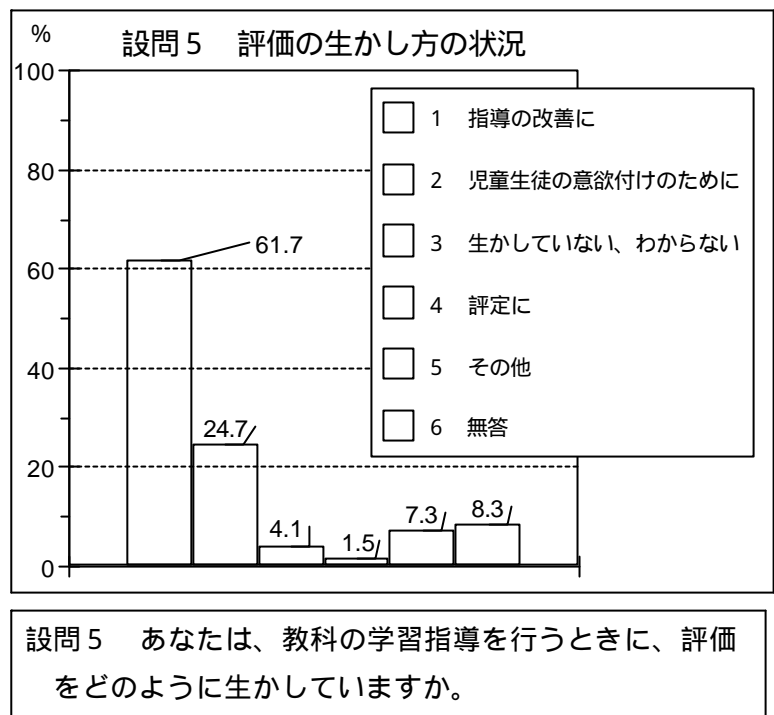
(5) 評価の生かし方

【図5】において、「指導の改善に」という回答と「児童生徒の意欲付けのために」という回答は、いずれも評価を指導と一体化して進めていることを示すものと考えます。また、「評定に」という回答が1.5%であることから、おおかたの教師は、評価を評定のためだけに行っているものだというとらえには立っていないと推察できます。評価をどのように生かしているかについての具体的な記述内容は、指導の改善として、「達成不十分の内容を把握し、再指導のポイントをとらえる」「つまずきをとらえて、個別指導の内容を明確にする」「次の授業構想の参考にする」「発問、指名計画に生かす」「グループ編成の参考にする」などでした。また、児童生徒の意欲付けのために、「よいところをほめる」「努力を認める」「評価の観点を示して取り組む意欲を喚起する」「評価方法を示して意欲付けをする」などでした。

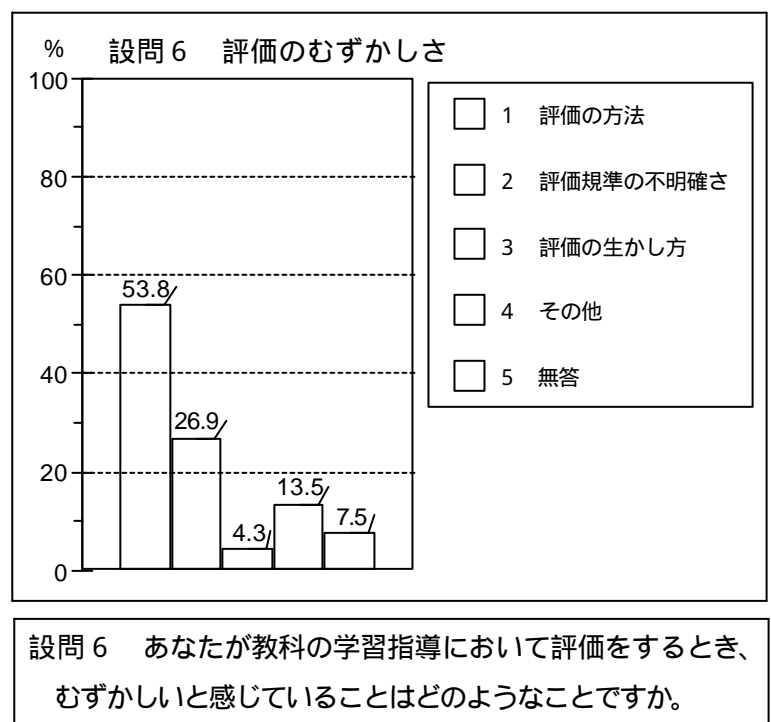
これらのことから、評価の生かし方の状況については、評価は学習指導と一体化して進めるものであるということを認識し、指導と評価の一体化を心がけて日常の学習指導を展開しているといえます。

(6) 評価のむずかしさ

【図6】において、回答が最も多い「評価の方法」の具体的な記述内容の主なものは、「情意面など、客観的に評価しづらい部分の評価の仕方がよく分からない」「児童生徒一人一人の努力を反映させる評価にむずかしさを感じる」「一人一人を多面的に評価することがむずかしい」などでした。日常の評価において、児童生徒一人一人について、学習状況を



【図5】評価の生かし方の状況



【図6】評価のむずかしさに関する状況

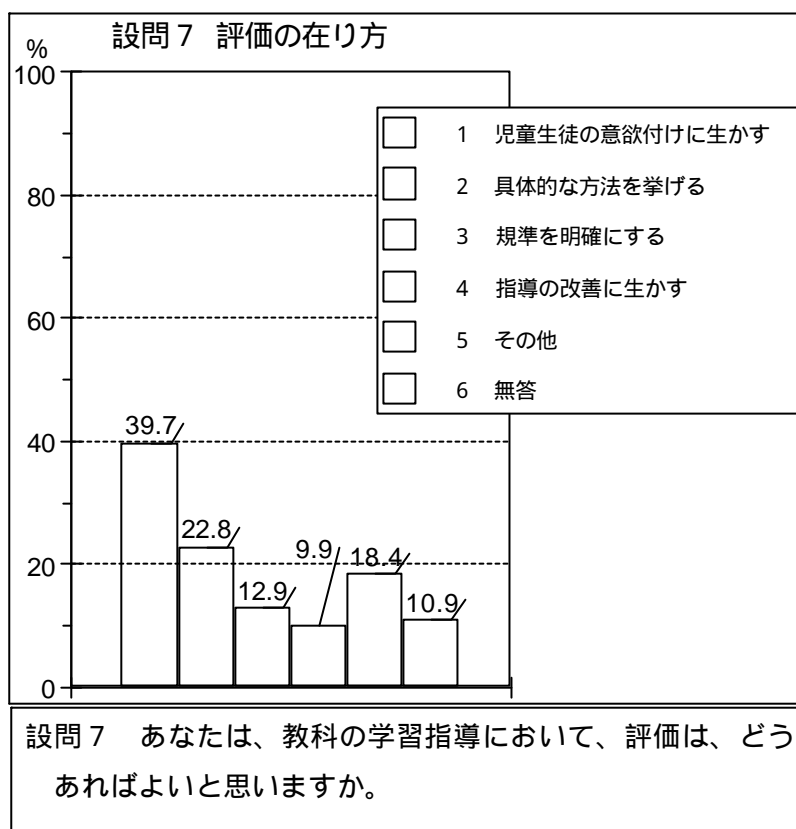
いろいろな面から把握しようとしていることがわかります。しかし、それらを適切に行うことのむずかしさを感じていることが読み取れます。

「評価規準の不明確さ」の回答には、「情意面の評価に明確な規準がなく、むずかしい」「評価を行っているが、規準が主観的ではないかと不安である」などの記述がみられました。

適切な評価のためには、児童生徒の何についてとらえるのかという評価項目と評価規準の設定と、目標に到達したかどうかを判断するための判断基準の明確化が必要です。また、個人の努力を認め、次の学習の意欲となるような一人一人に応じた適切な評価の工夫も必要です。

(7) 評価の在り方

【図7】の評価の在り方について、「児童生徒の意欲付けに生かす」と回答した教師が約4割いることから、評価を児童生徒の自己実現のために役立てたいと願っているものと推察されます。具体的な記述内容の主なものは、「児童生徒の意欲を高める評価」「学習の取り組みへの課題が明らかになる評価」でした。また、「規準を明確にする」と回答した教員がいることから、関心・意欲・態度などのような、いわゆる見えにくい学力を適切に評価したいと考えているものと推察されます。具体的な記述内容の主なものは、「誰もが共通して使える評価規準を作成することが必要」「児童生徒や保護者に、説明できるような評価」でした。



【図7】評価の在り方に関する状況

「具体的な方法を挙げる」の具体的な記述内容は、・学習過程の評価（形成的評価） ・到達度評価 ・個人内評価 ・ポートフォリオ ・自己評価 ・相互評価 ・絶対評価 ・相対評価 ・観点別評価 などでした。また、「その他」の具体的な記述内容は、・文章で表せる ・継続できる ・学校や児童生徒の実態に応じる ・指導内容に合っている ・多面的、総合的な評価 ・教科独自の評価 ・悩んでいる ・わからない などでした。

「指導の改善に生かす」という回答が約1割にとどまったのは、「評価をどのように生かしていますか」という設問5の結果とのかかわりから、児童生徒の意欲付けのためや指導の改善に生かしているという実態があるためと考えます。「その他」に分類した回答が約2割になったのは、「児童生徒に育てたい学力は、どのようなものですか」という設問2の結果とのかかわりから、育てたいと思っている学力が知識や技能にとどまらず、多岐にわたっており、それと相まって評価観も多様であるためと考えられます。

(8) 調査結果のまとめ

設問1～3の学力についての調査結果から得たことは、以下の3点です。

学力の高低はペーパーテストの点数によってとらえていると考える傾向が強い(設問1)

「育てたい学力」は多岐にわたるが、なかでも基礎的・基本的な知識や技能を確実に身に付けさせたいと考えている(設問2)

育てたい学力を育てるときのむずかしさは、学習指導をどのように改善したらよいかわからない、目指す姿に育てるための方法がわからないことである(設問3)

これらをまとめると、「学力の高低はペーパーテストの点数によってとらえていると考える傾向が強い。しかし、教師一人一人は、児童生徒に『育てたい学力』をそれぞれ思い描いており、それらは多岐にわたっている。そのなかで、最も多いのは、基礎的・基本的な知識や技能を確実に身に付けさせたいということである。また、教師は、育てたい学力を育てようと、日々学習指導を展開しているが、すべての児童生徒を十分に育成することができているとは言いがたい状況を感じ、学習指導の改善の方策を探っている」ということができます。そこで、教科における学力について明確にし、それが、児童生徒をどのような姿に育てることなのかを具体化するとともに、目標の実現状況を的確に把握し、指導方法の改善に取り組む必要があると考えました。

設問4～設問7の評価についての調査結果から得たことは、以下の4点です。

児童生徒の自己実現のために役立つ評価でありたいと願っている(設問7)

指導と評価の一体化を心がけて進めており、主に指導の改善に評価を生かしている(設問5)
様々な方法や材料を用いて、多角的に児童生徒の学習状況を把握しようとしている(設問4)

児童生徒一人一人を多面的にとらえ、適切に評価することがむずかしい(設問6)

これらをまとめると、「教師は、児童生徒の自己実現に役立つ評価を行いたいと願っている。学習指導においては、指導と評価を一体化して進めていて、評価は、主に教師自身の指導の改善に生かしている傾向にある。また、様々な評価の方法や材料を用いて、多角的に児童生徒の学習状況を把握しようとしている。しかし実際は、児童生徒一人一人を適切に評価することがむずかしいと感じている」ということができます。そこで、何のために、何を評価するのかということをも明らかにし、教科の特性に応じて、評価の方法や材料を選択し、どういう力がどのように伸びているのか、何が不足しているために伸びないのか等を適切に解釈し、評価結果を指導に生かすことが必要だと考えました。

3 児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本構想

(1) 児童生徒の資質や能力を高める指導と評価の進め方

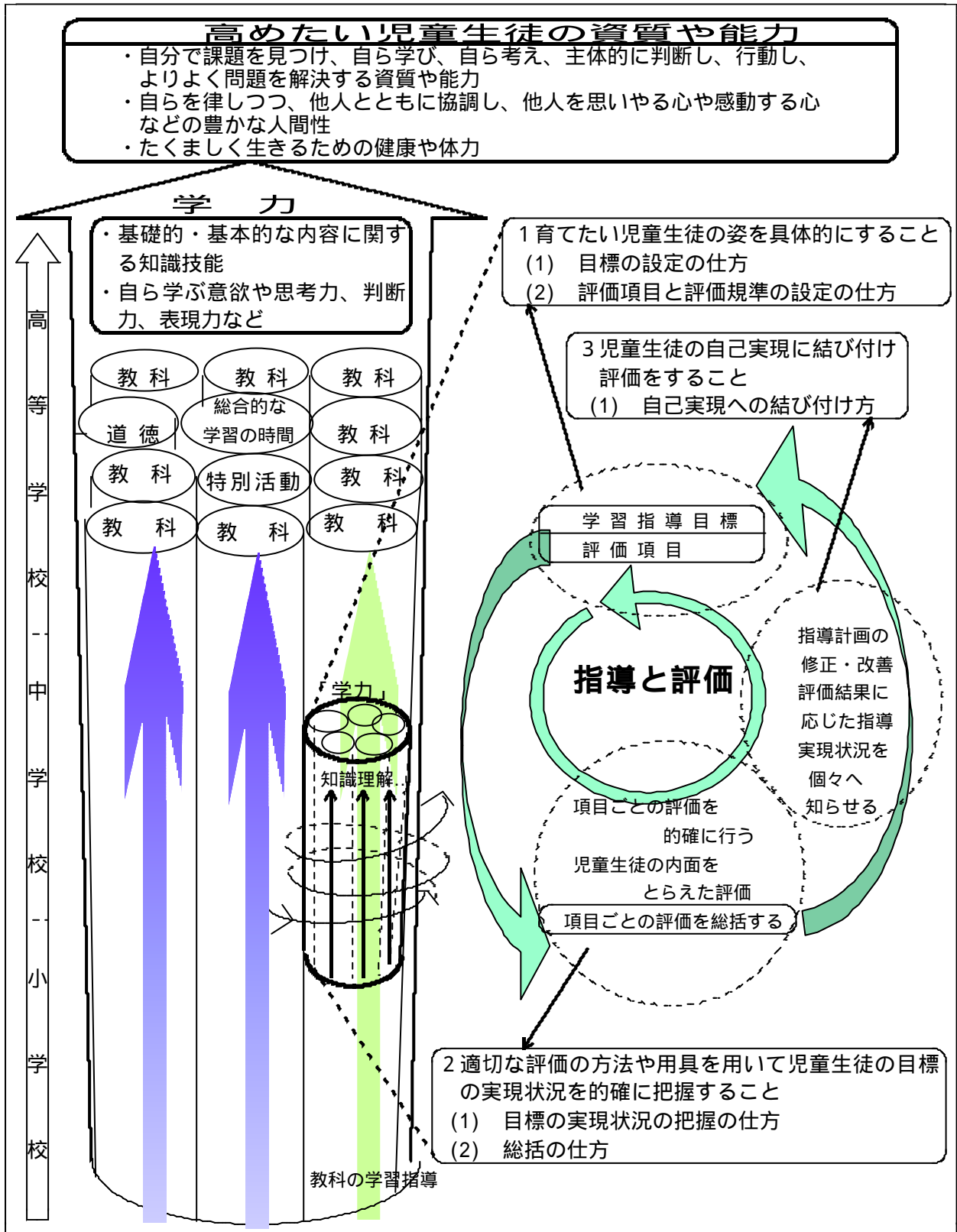
前項まで述べてきたことから、教科の指導における「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法の開発においては、以下の3点を特にも明確にしたいと考えました。

- 1 育てたい児童生徒の姿を具体的にすること
 - (1) 目標の設定の仕方
 - (2) 評価項目と評価規準の設定の仕方
- 2 適切な評価の方法や用具を用いて児童生徒の目標の実現状況を的確に把握すること
 - (1) 目標の実現状況の把握の仕方
 - (2) 総括の仕方
- 3 児童生徒の自己実現に結び付く評価をすること
 - (1) 自己実現への結び付け方

(2) 児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本構想図

基本的な考え方と調査結果から得たことをふまえ、本研究の基本構想図を作成しました。

【図8】は、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本構想図です。

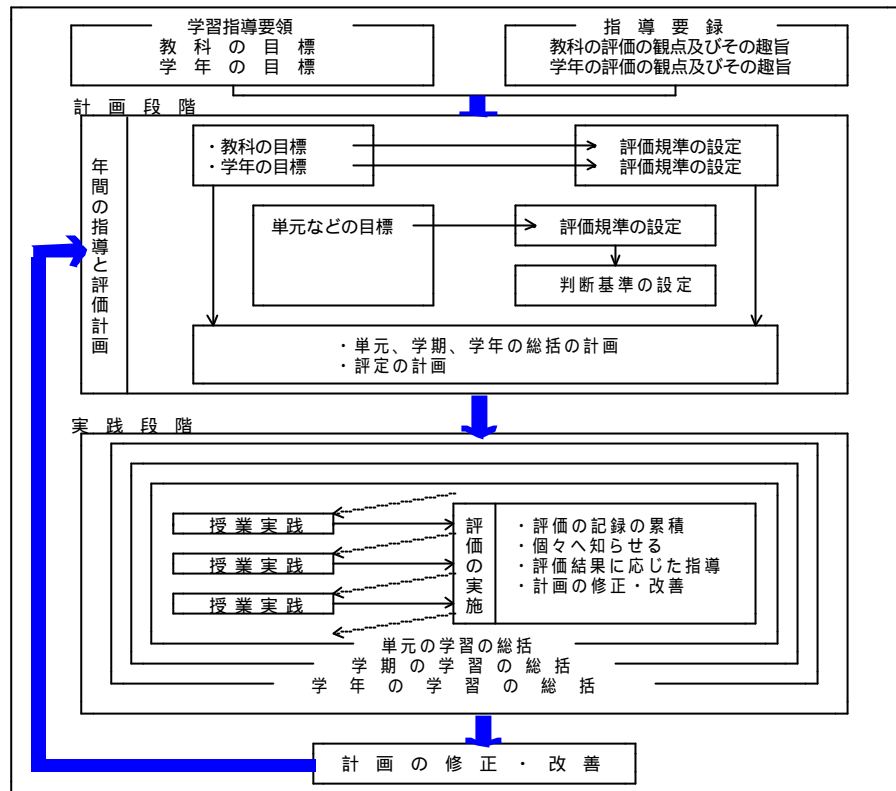


【図8】児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本構想図

4 児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての推進試案

【図9】は、指導と評価の推進の仕方を示したものです。特に各校において工夫、検討が必要な箇所をゴシック体で示しました。

児童生徒の資質や能力を高める指導と評価の推進は、計画段階では、学習指導要領と指導要録の内容を把握します。それらをもとに、教科の目標と評価規準、学年の目標と評価規準、単元（題材、主題、ユニット等）の目標と評価規準及び判断基準を設定します。さらに、学習の総括（単元、学期、学年ごと）の仕方、評定へ



【図9】児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての推進の仕方

の結び付け方を明確にします。これらのなかで特に各校で検討が必要なことは、判断基準の設定、総括の仕方についての計画、評定への結び付け方についての計画です。実践段階では、計画に沿って授業を実践し、評価の記録の累積、評価情報を個々へ知らせること、評価結果に応じた指導、指導計画の修正・改善を行い、さらに、単元、学期、学年ごとの目標の実現状況の総括をして、評定を行います。学習の総括と評定を行うときにも、評価の記録の累積、評価情報を個々へ知らせること、評価結果に応じた指導、指導計画の修正・改善が必要です。

(1) 育てたい児童生徒の姿を具体的にすること

ア 目標の設定の仕方

目標には、教科の目標、学年の目標、単元（題材、主題、ユニット等）の目標、単位時間の目標があります。

学年の目標は、学年末における教科の達成目標です。学年の目標が、各単元の目標に細分化し、さらに観点ごとの目標に細分化します。単位時間の学習指導は目標を実現するために展開するので、各単位時間の目標は、単元の目標と観点ごとの目標をもとにして具体化します。

これらの目標は、学習指導要領と児童生徒指導要録の評価の観点及びその趣旨に基づいて設定します。なお、単元、単位時間の目標は、より具体的に設定する必要があります。その際には、使用する教科書と照らし合わせることも大切です。

イ 評価項目と評価規準の設定の仕方

学習指導要領の内容の各項目が、その教科の評価項目となります。その各項目を観点ごとに分類し、

観点別の目標を設定します。観点別の目標を設定するのは、学習指導目標の実現状況の把握を分析的に行うためです。したがって、観点別学習状況は、目標の実現状況を判断するときの要素となり、各教科の評定を行う場合の基本的な要素となるものです。

設定した観点別の目標の実現状況を把握するために、観点ごとに評価規準を設定します。評価規準は、A「十分満足できると判断されるもの」、B「おおむね満足できると判断されるもの」、C「努力を要すると判断されるもの」の3段階です。このうち、B「おおむね満足できると判断されるもの」が、すべての児童生徒が少なくともこれだけは身に付けていなければならない状況に当たります。評価は、目標準拠のいわゆる絶対評価を行うのですから、B「おおむね満足できると判断される」状況が、どの児童生徒にも実現されたかどうかによります。このことから、評価規準は、B「おおむね満足できると判断されるもの」を明示する必要があります。さらに、A「十分満足できると判断されるもの」、C「努力を要すると判断されるもの」の規準を明らかにすることが望まれます。

(2) 適切な評価の方法や用具を用いて児童生徒の目標の実現状況を的確に把握すること

ア 目標の実現状況の把握の仕方

設定した評価規準をもとにして目標の実現状況の把握を行いますが、そこにはさらに、おおむね満足できると判断するための判断基準が必要です。判断基準は、児童生徒の姿について、何によりどのようになればおおむね満足だと判断するのかを明らかにするためのものです。

判断基準の設定は、単元（題材、主題、ユニット等）の評価規準に対応する判断基準と単位時間の評価規準に対応する判断基準の設定が必要です。単元等の評価規準に対応する判断基準を設定する際には、題材の学習の総括の仕方と合わせて検討する必要があります。

目標の実現状況を把握する方法（評価方法）としては、観察、作品分析、ノートやワークシート、レポートの分析、ペーパーテスト、質問紙、実技テスト、面接、自己評価、相互評価などがあります。これらの方法は、学習活動のどの場面で、どのような視点を設けて用いるのかを明らかにすることと、教科ごとの評価の視点によって組み合わせて使うことが大切です。

目標の実現状況は、評価規準に基づいて児童生徒個々に把握しますが、評価規準のA B Cの記録だけでなく、十分満足できると判断される状況や努力を要すると判断される状況などを具体的に記述し、児童生徒一人一人を具体的に把握するとともに、それをもとに一人一人の学習を充実させることが大切です。また、単元にかかわる既習の習得状況を把握しておき、学習過程や学習後の状況と比較する個人内評価を行い、個人の努力を見だし学習意欲の喚起など個々の学習の充実に活用することが大切です。

イ 総括の仕方

(ア) 単元、学期、学年の学習の総括

単元、学期、学年の学習の終了時には、目標の実現状況についての総括が必要です。目標の実現状況が、おおむね満足できるものかどうかの判断をどのようにするのか、総括の仕方について共通の判断基準をもつことが必要です。具体的には、累積した観点別の学習状況を観点ごとにどのようにまとめるのか、観点ごとにまとめたものをどのような基準で総括するのか、ということです。

累積した観点別学習状況をまとめる場合には、学習の過程で努力を要する状況であっても学習の終わりには目標を実現できていることもあり得るし、学習の過程で満足できる状況でも、学習後に目標が実現できていないような場合もあり得ることから、累積した評価規準A B Cの記録を単に平均化し

て判断してよい場合とそうでない場合があることなどに留意しなければなりません。学習の主たる目標を実現することができているかどうかの視点から判断するならば、観点によって評価結果の重みが異なる場合も考えられます。

総括については、判断のよりどころとして、累積した観点別学習状況の記録とまとめのテストを実施しその結果をもとにすることが考えられます。

観点別学習状況の評価は、学習指導要領の目標に準拠した「分析的な評価」という位置付けであることから、単元の目標の実現状況は、単位時間の学習状況の記録をもとに、学期の目標の実現状況は、学期内の単元ごとの学習状況の記録をもとに、学年の目標の実現状況は各学期の学習状況の記録をもとに総括していきます。

まとめのテストを実施する場合は、学習指導目標と評価項目をもとにテスト内容を検討し作成します。学習の終了時にテストを実施し、その結果に基づいて総括しますが、その際は観点別学習状況と合わせて児童生徒個々の学習状況を把握することが大切です。総括において忘れてはならないことは、どの観点もバランスよく実現できるようにすることが学習指導で目指す姿だということです。

(1) 評定の仕方

学年末には、指導要録の評定を絶対評価により行います。評定は、教科の目標に準拠した「総括的な評価」であり、簡潔で分かりやすい評価情報を提供するものという位置付けです。

評定の根拠となるのは、年間をとおして累積してきた目標の実現状況の記録です。単元、学期、学年ごとに計画的に総括を重ねた場合には、学期の学習を総括した学年の総括が評定の根拠となります。ここで考えなくてはならないことは、中学校においては、年間に積み重ねる学習状況については3段階で評価しますが、評定は5段階で表示するということです。学年の学習の総括で評価規準Cの場合は、何をもとに評定を1または2とするのか。同じように、評価規準Aの場合は、何をもとに評定を4または5とするのかということを考えなければなりません。評価規準Aの中でも5と判定するのはどういう場合か、評価規準Cの中でも1と判定するのはどういう場合か、その判断基準が必要です。これらは、評価計画を立てる時に明確にする必要があることはいうまでもないことですが、むずかしいことでもあります。実際の学習指導過程における児童生徒の学習状況の記録をもとに、よりよい判断基準を具体化していくという姿勢も大切なことと考えます。

(3) 児童生徒の自己実現に結び付く評価をすること

ア 自己実現への結び付け方

評価は、教師にとって、児童生徒が学習指導目標の実現にむけてどのように変容しているか、また、どのような点でつまづいているのかを把握し、どのように指導していけばよいかを明らかにするものです。したがって、努力を要する状況が生じた場合には、それに対して児童生徒全員が「おおむね満足できる状況」となることを目指して指導を積み重ねていかなければなりません。また、十分満足できる状況の場合にも、さらなる指導が必要になります。評価結果に応じた指導の手だてを計画しておき、児童生徒に機を得た指導を行うようにすることが必要なのです。

評価は、児童生徒にとって、学習過程において自らの目標の実現状況に気付き、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習の改善に役立てることができるような情報をもたらすものです。教師は、評価によって得た個々の児童生徒の目標の実現状況について、一人一人に知らせ、児童生徒が自分自身の状況を理解して、目標や目的をもって学習に臨めるようにしなければなりません。

目標の実現状況をいつ、どんな方法で知らせるかは、学期ごとの通信簿など統一したもののほか、教師の日常の創意工夫によるところが大きいと考えます。

知らせる際には、何ができているのか、何ができていないのかを知らせること、よいところをほめること、努力を認めること、個人の優れているところを知らせること、欠点の克服の仕方について教えることなど、児童生徒が自分自身の目標の実現状況を具体的にわかるように留意します。目標の実現状況を知らせるとともに、そのことに対する自分の考えを児童生徒個々にもたせ、一人一人が自分自身に気付くようにすることが大切です。児童生徒個々がもった感想に対して、教師が言葉を返すことは言うまでもなく、具体的にどう勉強したらよいのかといった努力の仕方を示すことが必要です。また、評価情報としては、相対評価(集団に準拠した評価)の結果も知らせることが必要と考えます。指導と評価は日常の積み重ねによって充実するものですから、毎日の学習ノートや提出物、小テストの結果に対するコメントなどが、

児童生徒の学習意欲を引き出し目標の実現へと結び付くのです。

評価は、児童生徒の状況を把握し記録して終わるのではなく、どの児童生徒も「おおむね満足できる状況」に育成するためになされるものです。そしてさらに、十分満足できる状況にむけて伸ばすために行うものです。したがって、総括の結果をうけて個々の児童生徒に何をしてやればいいのか、それを見極め実行することが必要です。結果を出してそのままにせず、教師と児童生徒がそれぞれの立場から手だてをもって目標を実現する学習に向かうことができるようにすることが大切です。

(4) 指導と評価計画の立案

以上のことをふまえて、指導と評価計画の立案を【表2-1】によって行います。なお【表2-2】は、【表2-1】の表中の番号を付した欄に記入する内容についてまとめたものです。

【表2-1】指導と評価計画表

科 指導と評価計画						
教科目標 1						
評価の観点及びその趣旨		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
		2				
学年目標 3						
学年の評価の観点の趣旨		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
		4				
内容のまとめりごとの学習内容						
5	6	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
		評価規準の具体別	7			
		評価規準の具体別				
		評価規準の具体別				
		評価規準の具体別				
単元・題材・ユニット等の学習指導と評価計画						
単元の目標 8						
単元の学習内容		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
9	目標 10	評価規準	11			
		判断基準	12			
単位時間ごとの計画		評価規準・判断基準				
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	評価結果に応じた指導
第1時	目標	13	14	15		
	学習内容・活動					
第2時	目標					
	学習内容・活動					
第3時	目標					
	学習内容・活動					
第4時	目標					
	学習内容・活動					
単元の学習の総括						
18		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	評価結果に応じた指導
		観点ごとの総括	16	19		
総括の仕方		17				個々へ知らせる方法
						20
学期の学習の総括						
23		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	評価結果に応じた指導
		観点ごとの総括	21	24		
総括の仕方		22				個々へ知らせる方法
						25
学年の学習の総括						
28		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	評価結果に応じた指導
		観点ごとの総括	26	29		
総括の仕方		27				個々へ知らせる方法
						30
評定		31				32

【表2 - 2】指導と評価計画表の記入する内容等

セル番号	記入する項目	記入する内容と留意点
1	教科の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1～5は、学習指導要領と指導要録の評価の観点の趣旨をもとに記入する ・ 5は、内容のまとまりごとに記入する ・ 6, 7は、評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料・評価規準、評価方法等の研究開発（報告） - （国立教育政策研究所教育課程研究センター 平成14年2月）をもとに記入する
2	評価の観点及びその趣旨	
3	学年の目標	
4	学年別の評価の観点の趣旨	
5	学習指導要領の内容	
6	内容のまとまりごとの評価規準	
7	内容のまとまりごとの評価規準の具体例	
8	単元（題材、主題、ユニット等）の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ この単元が、上記5のどの内容を指導する単元に当たるのかを確かめて、目標と学習内容を記入する ・ 使用する教科書と照らし合わせることも必要である ・ 単元の目標をもとに、観点ごとの目標を設定する ・ 少なくとも、評価規準B「おおむね満足できると判断される状況」を明記する ・ 目標が実現できたと判断する児童生徒の姿や評価方法、用具などを記入する
9	単元の学習内容	
10	観点別の目標	
11	観点別の評価規準	
12	観点別の判断基準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 9に記入した単元の学習内容を、13の各単位時間に位置付ける ・ 学習内容と10の観点別の目標をもとに、各単位時間の目標を設定する * 14～20は、児童生徒個人の学習の記録表としても活用できる ・ 本時の目標をもとに、少なくとも、評価規準B「おおむね満足できると判断される状況」とその判断基準を明記する。本時の目標にかかわる観点の欄に記入するので、空欄もある。判断基準は、児童生徒の姿やその評価方法、用具などを記入する ・ 単位時間の判断基準は、12に記載した単元の判断基準がもとなる * 評価規準に照らして目標の実現状況を記録する。また、学習の様子など特記事項を記録する
13	単位時間の目標・学習内容・活動	
14	単位時間の評価規準・判断基準	
15	評価結果に応じた指導	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目標の実現状況が「十分満足できる」または「努力を要する」場合、それぞれに応じてどのような指導を行うのか、その計画を記入する * 実際に行った指導とその時の学習の状況などを記録する
16	単位時間ごとの観点別学習状況（14）の総括の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単位時間ごとに累積した14の欄の事項をどのようにまとめて単元の観点ごとの実現状況として総括するのか、その仕方を記入する ・ 12の判断基準と照らし合わせて検討する ・ 単元の学習の総括をどのように行うのか記入する。観点ごとにまとめた結果をさらにどのようにまとめて総括するのか、その仕方を記入する * 17の計画によって得た総括結果を記録する * 単元の学習が、おおむね満足できる状況かどうかを記録する ・ 目標の実現状況が「十分満足できる」または「努力を要する」場合、それぞれに応じてどのような指導を行うのか、その計画を記入する * 実際に行った指導とその時の学習の状況などを記録する ・ 児童生徒個人の評価情報を各人に知らせる方法を記入する ・ 単元ごとに累積した16の欄の事項をどのようにまとめて学期の観点ごとの実現状況として総括するのか、その仕方を記入する ・ 学期の学習の総括をどのように行うのか記入する。観点ごとにまとめた結果をさらにどのようにまとめて総括するのか、その仕方を記入する * 22の計画によって得た総括結果を記録する * 学期の学習が、おおむね満足できる状況かどうかを記録する ・ 目標の実現状況が「十分満足できる」または「努力を要する」場合、それぞれに応じてどのような指導を行うのか、その計画を記入する * 実際に行った指導とその時の学習の状況などを記録する ・ 児童生徒個人の評価情報を各人に知らせる方法を記入する ・ 学期ごとに累積した21の欄の事項をどのようにまとめて学年の観点ごとの実現状況として総括するのか、その仕方を記入する ・ 学年の学習の総括をどのように行うのか記入する。観点ごとにまとめた結果をさらにどのようにまとめて総括するのか、その仕方を記入する * 27の計画によって得た総括結果を記録する * 学年の学習が、おおむね満足できる状況かどうかを記録する ・ 目標の実現状況が「十分満足できる」または「努力を要する」場合、それぞれに応じてどのような指導を行うのか、その計画を記入する * 実際に行った指導と学習の状況などを記録する ・ 児童生徒個人の評価情報を各人に知らせる方法を記入する ・ 累積した評価結果をどのように評価に結び付けるか記入する ・ 目標の実現状況が「十分満足できる」または「努力を要する」と判断された場合に、それに応じたどのような指導を準備しておくのかを記入する ・ 児童生徒個人の評価情報を各人に知らせる方法を記入する
17	単元の学習の総括の仕方	
18	単元の学習の総括記録	
19	評価結果に応じた指導	
20	個々へ知らせる方法	
21	各単元の観点別学習状況（16）の総括の仕方	
22	学期の学習の総括の仕方	
23	学期の学習の総括記録	
24	評価結果に応じた指導	
25	個々へ知らせる方法	
26	各学期の観点別学習状況（21）の総括の仕方	
27	学年の学習の総括の仕方	
28	学年の学習の総括記録	
29	評価結果に応じた指導	
30	個々へ知らせる方法	
31	評価結果に応じた指導	
32	学年の目標の実現状況について 評価結果に応じた指導 個々へ知らせる方法	

(注) 1 セル番号は、【表2 - 1】の各欄に付した番号と対応する。
2 記入する内容と留意点の欄の*には、記録表として用いる場合の内容を示した。

研究のまとめ

1 研究の成果

本年度の研究では、学力と評価についての基本的な考え方を検討するとともに、学力と評価の考え方について県内の教員に対して調査を行いました。そして、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価に関する基本構想を立案し、推進試案を作成することができました。

基本的な考え方の検討では、この研究における高めたい児童生徒の資質や能力と「学力」の意味、学習指導における評価とその在り方について、以下のように確認しました。

高めたい児童生徒の資質や能力とは、「生きる力」であり、学力とは、「基礎的・基本的な内容に関する知識や技能、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力など」であるととらえた。本研究では、教科における学力を「学力」と表記することとした。

学習指導における評価は、教師の指導や児童生徒の学習の改善を行うためのものであり、結果として児童生徒の学習の充実につながるものでなければならない。学習指導においては、指導と評価を常に一体として行うことが必要である。

2 今後の課題

2～3年次は、教科ごとの推進試案を作成するとともに具体仮説を設定し、推進試案に基づく学習指導の実践を行います。それによって、推進試案の妥当性を検討し、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価について明らかにしていきます。

終わりにになりましたが、この研究を進めるにあたりご協力いただきました県内の先生方に心からお礼申し上げます。

【主な参考文献等】

- 1) 佐野金吾・小島宏 編著 「新しい評価の実際1・2」 ぎょうせい 2001年
- 2) 「悠」編集部 編 「新指導要録・教課審答申」 ぎょうせい 2001年
- 3) 人間教育研究協議会編 「学力向上をめざす教育」 金子書房 2001年
- 4) 井上正明 編 「教育評価読本」 教育開発研究所 2001年
- 5) 新井郁男 編 「子どもの学力読本」 教育開発研究所 2001年
- 6) 天野正輝 著 「カリキュラムと教育評価の探究」 文化書房博文社 2001年
- 7) 辰野千尋 「学習評価基本ハンドブック - 指導と評価の一体化を目指して - 」図書文化 2001年
- 8) 児島邦宏・安齋省一 編 「中学校新指導要録の解説と記入の実際」 教育出版 2001年
- 9) 森敏昭・秋田喜代美 編 「教育評価重要用語300の基礎知識」 明治図書 2000年
- 10) 天野正輝 編 「教育課程重要用語300の基礎知識」 明治図書 1999年
- 11) 熱海則夫・澁澤文隆 編集 「新しい資質・能力の育成」 明治図書 1999年
- 12) 「悠」編集部 編 「生きる力」の読み方 ぎょうせい 1997年
- 13) 北尾倫彦 編集 「新しい評価観と学習評価」 図書文化 1996年
- 14) 北尾倫彦・長瀬荘一 編 「観点別学習状況の評価基準表 - 単元の評価目標と判定基準 - 」図書文化 1996年
- 15) 北尾倫彦 編 「学習評価の改善」 国立教育会館 1995年
- 16) 参考URL 「<http://www.rikyo.osaka-kyoiku.ac.jp/matsumoto/hyoka002.html>」